



一貫コース通信

～趣味を「探究」してみる～

私の趣味はゴルフである。静かに自分と向き合うことができ、生じる結果がすべて自分の責任であるという厳しさが20年以上も私を虜にしている。とはいってもここ2年程はコースどころか練習すらできておらず、一時はベストスコア76まで到達した腕前が、現在ではどこまで劣化してしまったのかと、自宅のクラブセット(Titleist)を眺めながら恐怖する毎日である。“Titleist”とは、クラブからボール、アパレルまでを扱うプロ志向のゴルフブランドであり、ことクラブに関しては、一般的な日本のアマチュアゴルファーのHS(ヘッドスピード)では扱うことが難しいとされている。

ゴルフにあまり興味のない皆さんにもある程度イメージができるように、ゴルフクラブの“難しさ”について簡単に述べれば、①クラブヘッドが小さい(ボールに当たりにくい) / ②芯が狭い(少しずれると距離が著しく落ちる) / ③スイングのミスにクラブ挙動が敏感に反応する / ④飛ばない(他メーカー比較)などが分かりやすいものとして挙げられる。「いいこと1つもないじゃないか」と思ったとすれば、皆さんのゴルフに関する知見が浅いと言わざるを得ない。いま示した①～④は一見強烈なデメリットに見えるが、練習を繰り返してスイングの再現性を上昇させることで、別の側面が見えてくる。①'ヘッドの大きさを絞ることで芝(ラフ)の抵抗を少なくできる / ②'意図的に芯をずらすことでボールのスピニング量をコントロールすることができる / ③'スイングの変化を的確に打球に反映できる / ④'狙った場所に止めることがより重要であり、飛ばすことが目的のクラブではしっかりと飛距離が出せる。これら①'～④'はプロやそれに準じる競技ゴルファーにとっては大きなメリットに変化する。実際、クラブヘッドが大きく、芯が広く、どんなスイングでも同じような打球になるようなクラブは多く開発されているが、ヘッドの大きさに伴う“慣性モーメント(クラブの回転しにくさと解釈してください)”の大きさから操作性が悪く、ボールのスピニング量が増えるため、打球の軌跡が最大飛距離曲線から外れるようになる(吹きあがり)。さらには、その直進性の高さからボールを操りにくく、“ぼんやりと”真っすぐ飛んでいく。これで、“難しさ”の功罪についてはある程度理解して頂けたと思うが、私がTitleistのクラブを寵愛する理由はまた別にある。ここからはさらに理解が苦しいと思うが、しっかりとついてきて頂きたい。

主観だが、Titleistと他メーカーのクラブの大きな違いは「打感」であると思っている。「打感」とは言葉の通り、“芯に当たった時の感触”である。理想的なスイング軌道でボールを捉えたときに手に残る“吸いつくような感覚”への渴望こそ、私がゴルフを続ける理由そのものである。極論すれば、飛んで行った球が林に入ろうが、池に落ちようが、その“感触”を味わうことさえできれば、ショットへの満足度を高く維持することができる。この「打感」というものはクラブヘッドの素材に起因するもので、Titleistのアイアン(私が使用しているものも含め)は、軟鉄のみを素材とし、鍛造したのだからこそ引き出せる“吸いつきの

良さ”からくるものである。このことは、前述の③/③’をもたらず要因の1つになっており、対をなす所謂「合成素材」を用いたクラブヘッドでは、ボールとコンタクトするフェース面に別の素材をはめ込むことで生じる反発係数の高さ故、ボールを瞬時に弾いてしまう。結果、軟鉄鍛造アイアンと比較してボールとの接着時間が短くなり、打球操作性が低下するという原理である。ただ、ここまでの話は”軟鉄と別素材”の説明をしたに過ぎず、Titleistと他メーカーの違いを示しているわけではないことはお気づきだろう。事実として、軟鉄鍛造アイアンはあらゆるゴルフメーカーから発売されており、Titleistの専売特許となっているわけではない。それでは一体何が違うのか。それは、「三浦技研」の存在である。

ゴルフにいかにか疎くても TigarWoods はご存じであろう。TigarWoods は台頭期～全盛期、Titleist と用具契約を結んでいた時代があるのだが、Titleist には当時の Tigar が要求するレベルのアイアンを作ることができず、そのアイアンヘッドの作成を日本の「三浦技研」に依頼したという歴史がある。この時代に作成された型は 2018 年に Titleist がモデルチェンジをする前まで系譜として受け継がれ、世界中の拘りの強いユーザーは他メーカーに見向きもせず Titleist のアイアンを使い続けている。当然、私が所有するクラブも 2018 年製のものであり、これを使うときの言いようのない興奮は、本紙面で到底伝わるものでなく、買い替えの予定は永久にない。

さて、ここまで皆さんには理解できないであろう趣味の話をも長々と続けたが、若干の教育的メッセージを残して閉じることにする。多くの皆さんにとって、ゴルフというスポーツは身近とは言えないものであるが、多少でも知見をもって理解に努めれば、違った側面が見えることが伝わっていれば嬉しい。近年では、「情報」という科目が大学入試に加わり、プログラミングや ICT, ChatGPT をはじめとする生成 AI など、新しく、そして何となく重要そうな単語が皆さんの周りに湧いてきており、使い古された「国際化」も未だに^{くすぶ} 燻り続けている。これらに対し、少しでも知見を得られるようなアクションを起こしているだろうか？ もっと踏み込めば、現在システムエンジニアとして働いていながら、プログラミングができないという人がほとんどであるにも関わらず、将来的に全員がプログラムコードを書けるようになったり、福島市デジタルクーポンのスマートフォン操作に苦労する人のための対応窓口が混んでいるような状況で、AI の支配が^{はびこ} 蔓延るような世の中になるだろうか？ 皆さんにこの問いに対しての結論を求めるわけではないが、せめて、ほんの少しでも「調べて、考えてみる」ことは実践してみしてほしい。冠だけの「探究活動」ではなく、正確な知識に裏付けを得た知識を「知見」に昇華させて欲しい。すべてでなくてよい。1つの事象に対してでもそんなことができれば、その過程はきっと応用でき、何度も何度も使えるはずだと思っている。